



桃 色

2005(平成17)年5月21日鑑賞(ホクテンザ1)

監督・脚本・製作＝楊凡^{ヨウファン}／出演＝松坂慶子^{マツザカケイコ}／章小蕙^{テレス・チャン}／河利秀^{ハリス}／Sho^{ショウ}／吳嘉龍^{ウーカロン} (シナジー配給／2004年香港映画／103分)

……香港を舞台として、50歳を超えた松坂慶子がチャイナドレスで官能映画への挑戦だが、他の美人女優と比べてどうしてもムリが……？ もったいぶったセリフ回しとイメージ的映像のくり返し、そして期待ほどでもない官能度(?)にいい加減うんざり……。これでは観客が『花と蛇2 パリ／静子』(05年)の方へ流れても当然か……。また、王家衛監督^{ウエン・カーウエイ}の『花様年華』(00年)での張曼玉^{マギー・チェン}の美しさにはとてもとても……。

大いに期待したのだが……？

この映画はマイナーな作品だが、予告編を観てこれは絶対！と思って大いに期待していたもの。なぜなら、そのイメージは、あの王家衛監督^{ウエン・カーウエイ}の『花様年華』(00年)そっくりで、香港を舞台とし、美しいチャイナドレスを着た松坂慶子をはじめとする美人女優が登場する官能映画だから……。そんな大きな期待をもって観はじめたのだが……。最初のシーンに登場するメイライ^{テレサ・チャン}(章小蕙)の美しさにはそれだけで十分満足。しかし、松坂慶子扮する梅木夫人が登場すると、これが何ともハデな服装とケバイ化粧、そしてもったいぶった、まどろっこしいしゃべり……。私としては、それを見ているだけでついイライラ。どうもこれは……？

松坂慶子は今いくつ？

松坂慶子は現在NHKの大河ドラマで平清盛の妻「時子」を演じ、それなりの存在

感を見せつけている。また過去の実績も、『道頓堀川』（82年）、『蒲田行進曲』（82年）をはじめとして、すばらしいもの。しかし、吉永小百合よりは若いものの、1952年生まれだから既に50歳を超えたため、役柄が限定されてくるのは仕方がないもの。しかし、その年代でしか演じることができない役柄はいくらでもあるはずで、まだまだ記念作となりうる映画にめぐり合うチャンスもあろうというもの。しかし、この映画出演の選択は、彼女にとって大まちがい……？

パンフレットには、松坂慶子はこの映画のシナリオを気に入り、謎の主人公、梅木夫人の役に深く興味を感じてくれた、と書かれてある。たしかに、1人のカメラマンを愛し続けるために性転換までしたという美貌の女性、梅木夫人というキャラクターは、映画のネタとしては面白いもののだが、それを松坂慶子が官能美タップリに演ずるにはかなりムリがある……？ そこで映画は本物の性転換者であるハリスを「若き日の梅木夫人」として起用することによってそれなりのストーリーを組み立てたが……？ この映画での松坂慶子は官能的というよりはケバイだけ……？ 女優松坂慶子としては最悪の選択では……？

メイライはいいオンナ！

梅木夫人からアパートの借り手を探してくれという依頼を受けるのは、不動産の仲介をしているメイライ。前半はカッコいいビジネスウーマンとして、そして後半は謎の美青年カメラマン Kim (Sho) に翻弄される女として、その美しさと存在感を見せつけてくれる。これはホントにいいオンナ……。

もっともストーリー自体がスローテンポであるうえ、イメージシーンが非常に多いため、ホンモノの迫力あるラブシーンは少なく、かなり欲求不満気味……？ こんないいオンナを「芸術的官能映画」に起用するのなら、徹底的にその魅力を前面に押し出してほしいものだが……？

『花と蛇』比較

同じ映画館の中では、杉本彩主演の迫真モノ SM 映画 (?) 『花と蛇2 パリ／静子』が上映されているが、この『桃色』の中に出てくる SM シーンは、『花と蛇2 パリ／静子』と比べればまるで「子供だまし」で、その差は歴然としたもの……？

パンフレットには、楊 ^{ジョン・ファン} 凡監督の「この映画がポルノ映画と決めつけられて、迷惑を

受けた。しかし、この映画は芸術的官能映画なのだ」という趣旨のインタビューが載せられているが、私には全然理解できない。こんな中途半端な官能映画(?)では観客の感覚も決して刺激されないのでは……?

Sho はカッコいい?

若き日の(?)梅木夫人からも、そしてメイライからも心底ホレられるいい男のカメラマン Kim を演ずるのが Sho。パンフレットによれば、彼は東京生まれの日本人とのこと。そして、香港でキャリアを積む中で、生来の長身とスリムなボディで人気モデルになっただけでなく、私も長身とスリムさ自体は認めるし、別にいい男であることにケチをつけるつもりはないが、ヒゲを伸ばしてランニングシャツ姿で家の中でゴロゴロしているのがホントにそんなにカッコいい……? 女性客の本心を聞かせてもらいたいものだが……?

警官No.4708は全くセリフなし!

メイライは制服マニア。つまり、カッコいい制服に身を固めた男性に心惹かれるらしい……? 制服の中でも香港警察の制服が1番スキとのこと。これは、男性がスチュワーデスの制服姿に惹かれるのと同じようなものかもしれないが、女性の場合のその趣味は多少倒錯的……? そんなメイライの前に再三登場するのが、メイライの理想どおり、警察官の制服に身を固めた長身の警官 No.4708。お互い道路ですれ違うたびにその存在を意識しているがメイライには恋人のカメラマン Kim がいるから、警官 No.4708は付け足しで、いわばいつも刺身のつま……? 1人欲求不満を抱えながらメイライのアパートを行ったり来たり。そしてそんな警官 No.4708の行動がわかっているメイライも、その気を引くかのように、時々ドアを開けてみたり……? 何とも意地悪(?)なことだが、そんなこんなやりとりをこの映画は延々と……? 警官 No.4708はスクリーン上に再三再四登場するが、結局始めから終わりまで一切セリフなし。こりゃ一体ナニ……? 私は楊 ヨン・ファン 凡監督は全然知らないが、製作の陳 フルーツ・チャン 果はよく知っている。何ととっても面白かったのが『ハリウッド★ホンコン』(01年 監督・脚本)だが、その前の『ドリアン ドリアン』(00年 監督・脚本)も面白かった。陳 フルーツ・チャン 果の製作にしては、ちょっと出来が悪すぎるのでは……?

2005(平成17)年5月23日記